



映画監督 中江 裕司

命短し、恋せよ乙女

人にせよ、物にせよ、自然にせよ、恋して生けるから生き続けるのだ。恋しさが生きてくる証だ。

「ナビタの恋」は、上映キャラバンとして各地の公民館などを上映してまわってくる。糸満市で上映したとき、上映が終わって一人の婦人が私を監督と知りて近づいてきた。「六十代ぐらいの方だろうか。『実は私にもあつたのよ』ずっと

人にして、物にして、自然にして、恋して生けるから生き続けるのだ。恋しさが生きてくる証だ。

「ナビタの恋」は、上映キャラバンとして各地の公民館などを上映してまわってくる。糸満市で上映したとき、上映が終わって一人の婦人が私を監督と知りて近づいてきた。「六十代ぐらいの方だろうか。『実は私にもあつたのよ』ずっと

命短し、恋せよ乙女。私の作った映画「ナビタの恋」では、たまたま乙女は七十九歳だったが、年齢と恋は関係ない。本土の取材の人からよくお年寄りの恋愛映画を考えつかれましたね、と言われるのが不思議でならない。つまり本土ではお年寄りは恋愛をしない、恋愛して欲しくない、というのが大前提らしい。それはおかしな話だ。恋心なんて誰にも止められない。恋愛に引退はないし、いつまでも現役でいるのが恋愛のことなのだ。

初恋の人が忘れられなくて、先日会いに行つたのよ。その後は涙で声があがめて話されませんでした。私もどうしてかわからず、そのままになってしまったが、自分が作った映画がフィクションを越えて現実の世界と繋がつて行くことに驚きを憶えました。その後また一人の婦人の方が来られて私に向かって「う言われた」「私にも実はあったのよ。」の間その彼が会いに来ようたのよ」と、楽しそうに話された。何か救われる感じがした。

島々であつたくと言つていいほど反応が違うし、その生な手こたえどこの島は那覇に居ては絶対感じられないことだ。私は島々からたくさんものを見、そこで見ついたものを映画という形にしてきた。今後もそのつきあいは永遠に続いていくことだけ思つ。

沖縄は今、いろんなことで注目されてゐる土地だと思う。今まで基地、戦争という視点でしか語らなかった沖縄は、自分たちのこと向前きに売り込むチャンスだと思う。自分たちは辛かった。こんなにも被害者だ。そんなことを言つている場合ではないと思う。前向

私は「Jの夏、サミタのオープニングフェスティバルの演出をする」となつて。サミタでは沖縄県民はガマンすることも多いと思う。おはあたちは、海の向こうの遠じいのか、たくさん的人が来る事を嬉しく思い、歓迎したいと思うだろう。しかし、実際にサミタと言つ祭りに参加できるのは限られた人たちだ。だから私は一人で多くの県民が参加出来る場を作ればと思った。うまんちゅ力チヤーシー大会と名付けたこの祭りは、出演者と観客の区別がない誰もが参加できる祭りだ。一人でも多くの人が平和を願い力チャーシーを舞つてくれる事が出来、沖縄の豊かさを見せる事が出来る」となると思つ。七月二十一日、夜、名護の一十一世紀の森で皆さんをお待ちしてます。」つし

私は沖縄は豊かだと思つ。その豊かさを世界に言わなくてはなり

ぬ。私はその考え方を離島キャラバンを経て強くした。物質的な豊かさではなく、風景や風土、そして本物の芸能がある。そして、その土壤に育てられた個性的な人々がいる。沖縄はこの豊かさに支えられていると思う。本土からも、これらを求めての移住者も多い。しかし、私たち沖縄県民自身がこの豊かさに気づいていない。

私は「Jの夏、サミタのオープニングフェスティバルの演出をする」となつて。サミタでは沖縄県民はガマンすることも多いと思う。おはあたちは、海の向こうの遠じいのか、たくさん的人が来る事を嬉しく思い、歓迎したいと思うだろう。しかし、実際にサミタと言つ祭りに参加できるのは限られた人たちだ。だから私は一人で多くの県民が参加出来る場を作ればと思った。うまんちゅ力チヤーシー大会と名付けたこの祭りは、出演者と観客の区別がない誰もが参加できる祭りだ。一人でも多くの人が平和を願い力チャーシーを舞つてくれる事が出来、沖縄の豊かさを見せる事が出来る」となると思つ。七月二十一日、夜、名護の一十一世紀の森で皆さんをお待ちしてます。」つし